(真里) 毒を盛る｡

(麻美) 毒？

え？ それマジで言ってんの？

うん｡

(麻美) 中村さんを毒殺するってこと？

いや 殺しはしないよ｡

ちょっと 動けなくなるようにするだけ｡

ねぇ あーちんさぁ 薬学部と医学部出てるんだからそういうの分かったりしないの？

(麻美) そういうのって？

何か 半日ぐらい動けなくなる ようにするような薬 ない？

(麻美) 食中毒とか？ >> そういうの そういうの｡

あーちん 作れたりする？

(麻美) あ… 作れなくはないけど…｡

うちらは ただじゃ済まないよね｡ >> ただじゃ済まないって？

(麻美) だって 機長がそんなことになったらさ絶対に 直前に口にしたものを 調べられるじゃん｡ >> そうだね｡

(麻美) そしたら まず疑われるのは うちらじゃん｡

>> 一番の容疑者だね｡

(麻美) でしょ？

すぐに呼び戻されて 調べられて 逮捕だよ？

まぁ そうなるね｡

(麻美) いいの？ それで｡ >> いや 別によくはないけど180人の命が失われるよりは マシじゃない？

(麻美) う～ん… まぁね｡

いや でも まぁさまだ やるって決まったわけじゃ ないからさ｡

(麻美) そうだね｡ >> うん｡

もう一回お願いしに行って それでもダメだったら…ってことね｡

(麻美) うん｡

ちなみに これ 徳的には どうなんだろうね？

>> あ～ どうだろうね？

(麻美) いやさ次 人間って言われてるのを 蹴って来てるからさ別に 人間じゃない覚悟は できてるんだけどでも だからといって 何でもいいわけではないじゃん｡

いや 私だってそうだよ｡

え？ 待って｡

(麻美) ん？

あーちん 次 人間って言われたの？

(麻美) うん そうだよ｡ >> へぇ～｡

(麻美) ちなみに 前回は何って言われたの？

>> 前回？

(麻美) うん｡

>> フナムシ…｡

(麻美) あっ フナムシね｡

あれだ ｢海のゴキブリ｣ って言われてるやつだ｡

いや 別にそう言われてるだけで 全く別の生き物だからね｡

(麻美) そうだよね｡

てか あーちん 人間蹴ってやり直してんだ｡

偉いね｡

(麻美) いやいや｡

だって まりりんだって 仮に 次 人間ですって言われたらやり直してたでしょ？

>> そうだね｡

(麻美) ん？

何？ 何か今 変な間が空いたんだけど｡

いやいや… やり直すよ｡

(麻美) 今 一瞬 揺れたよね？ >> 揺れてないよ｡

(麻美) 揺れた 揺れた 揺れた…｡ >> 揺れてない 揺れてない｡

そんなことないよ｡

(麻美) ひど…｡

そりゃ 海ゴキって言われるわ｡ >> 略さないで｡

別の生き物だから｡

(麻美) 失礼します。

(堀口) はい。

(麻美) 堀口さん すみません 例の937便の件なんですけれども堀口さんのお力で 何とかできないですかね？

(堀口) いやぁ 近藤さんには いつも助けてもらってるから私も力になりたいんですけどさすがに こればっかりは 私の力じゃ無理ですね｡

(麻美) そうですか 例えば私が入っている別の台北便と 代わってもらえば中村さんの資格 切れなくて 済むんだと思うんですよね｡

いや 若手のパイロットならそういうお願いも できなくはないんですけど中村キャプテンに それを言うのは ちょっと…｡

(麻美) 無理ですか？ >> そうですね 取りあえず中村キャプテンが キャンセルになった時は近藤さんに入ってもらえる ようにはしとくんで｡

(麻美) なるほど｡ >> うん ごめんなさい｡

これが私の立場でできる 限界ですね｡

(麻美) いえいえ すいません 無理言って｡

⟨確かに私がいくら キャリアを積んだとはいえ中村さんに比べれば まだまだ ぺいぺい⟩

⟨それでも私は 代わって もらわなければいけない⟩

中村さん｡

すいません 例の937便の件 なんですけれども｡

どうにか 代わっていただけないですかね？

(中村) だから無理なんだよ｡

その便 飛ばないと 空港資格 切れちゃうんだから｡

(麻美) でしたら 中村さんの資格が切れる前に私が別の台北便を代わるんで｡

チッ いや 俺のスケジュールも あるんだからそんな簡単にいくかよ｡

(麻美) そこを何とかお願いします｡

同じ地元のよしみで｡ >> なぁ？

何か勘違いしてないか？

(麻美) はい？

そもそも 便の指定をできないのは ルールだろ｡

(麻美) でも皆さん 何だかんだ ﾘｸｴｽﾄ出してるじゃないですか｡

現に 中村さんだって 今回入れたのも…｡

チッ いいかげんにしろよ！

俺のは 空港資格が切れるからで 仕事上の理由なんだよ｡

それを幼なじみが乗るからとかそんなプライベートな理由で 代わってくれなんてさすがに 度を越えてんじゃねえのか？

(麻美) すいません…｡

>> マジか…｡

(麻美) びくともしない｡

そっか｡

じゃあもう 強行手段しかないね｡

(麻美) やろう｡

(麻美) えっと 中村さんが 通るルートなんだけどえ～ えっと… う～んと…｡

ちょっと待って｡

ねぇ これさ どけて広げない？

>> あぁ テーブル？

(麻美) うん｡

えっと 中村さんはおっと 毎回…｡ >> うん｡

(麻美) この… あっ｡

このさ 通用口から入ってこのルートを通るよね｡ >> うん 通るね｡

(麻美) ちなみに 937便はこの61番搭乗口ね｡

(麻美) これさ もうちょっと 小っちゃいのないかな？

>> 小っちゃいの？

(麻美) うん｡

で 中村さんは毎回 フライト２時間前に クルーラウンジに入ってこの席で コーヒーを飲みます｡ >> うん｡

(麻美の声) だから私は ９時50分には クルーラウンジに入ってこの窓際の席で待機してるね｡

(真里の声) うん 分かった｡

(麻美の声) で 中村さんが座ったら私 まりりんにワンコール 鳴らすから そしたら入ってきてで 反対側からさ 中村さんに話しかけてくれる？

(真里の声) 天候の話とかするね｡

(麻美の声) で 中村さんが まりりんのほう向いてる隙に私が薬をコーヒーに入れます｡

(真里の声) それって どのくらいの効き目なの？

(麻美の声) 遅くとも30分以内に 下痢と嘔吐に襲われてほぼ食中毒と変わらない状態が 少なくとも半日続くかな｡

その後 私の所に連絡が来て 私が機長としてで まりりんは そのまま 副操縦士として搭乗する…っていう流れ｡ >> ＯＫ！

(麻美) うちらも ついに犯罪者か｡

犯罪者だねぇ｡

(麻美) もうさすがに 地元には戻れないかな｡

うん まぁ そうなったらさ２人で どっか遠いとこ住もうよ｡

(麻美) そうだね｡

まずは 作戦を成功させよう｡

(麻美) 分かった｡

(麻美) ⟨そして…⟩

⟨運命のフライト当日⟩

⟨出発２時間半前⟩

⟨いよいよ この後 作戦決行⟩

(麻美) ⟨私は 上司の飲み物に毒物を混入し食中毒を起こさせる⟩

⟨まさか 前の人生で学んだ知識をこんな形で使うとは 思わなかった⟩

♪～

(麻美) ⟨もちろん これは犯罪行為で帰国後に私たちは逮捕される⟩

⟨そうなれば 家族にも 迷惑がかかるだろうしなっちや みーぽんたちも きっと離れていく⟩

(麻美) ⟨それでも 彼女たちを含む乗客180人の命には 代えられな…⟩

>> 近藤さん？

(麻美) え？

(美奈子) お久しぶりです！

(麻美) えぇ～！

河口さん？ >> そうです やっと会えた～！

(麻美) えっ 何で!? >> あの時 近藤さんの話聞いて私も次があったら新しいことに 挑戦してみようって思ってたんです それで次の人生の時にたまたま雑誌見てたら 近藤さん パイロットとして載ってて｡

(麻美) 見てくれたんだ？ >> はい｡

あれ見て 航空関係もいいなって思って近藤さんのいるこの会社 受けたんですよ｡

(麻美) そうなんだ｡

いやぁ でも いざなってみると 大変ですね｡

もちろん やり甲斐はあるんですけどやっぱり 時間は不規則になるし 体調管理も大変じゃないですか｡

(麻美) まぁね｡ >> あと どの職業でも嫌な上司っているんですね｡

(麻美) うん そうかもね｡

いや もちろん いい人はいるんですけど…｡

(麻美) ⟨このタイミングで ロングの愚痴は厳しい⟩

⟨そろそろ切り上げないと 中村さんが来てしまう⟩

てか 聞いてくださいよ｡

私 これから フライトなんですけど昨日 中村キャプテンから ｢あした 乗客で俺の知り合いで大河内って人が いるから頼むね｣とか言われて｡

｢え それ優遇しろってこと？｣ とか思いながら調べてみたらその乗客 中村キャプテンの 愛人だったんですよ｡

(麻美) うわ！

ヤバくないですか？ 自分の愛人 乗せて不倫旅行ですよ｡

(麻美) おっ… えぇ!?

私 他人の不倫とか どうでもいいほうなんですけどただ私 市役所時代に あいつに窓口で超詰められたことあってマジで嫌な感じだったから ハッキリ覚えてて｡

(麻美) そうなんだ｡ >> そうですよ｡

あんだけ ひとのこと 税金泥棒とか言っといて自分は愛人乗せて公私混同かよ とか思ったらムカついてきて｡

私 即行 匿名で奥さんに電話して チクったんですよ｡

(麻美) おぉ！

そしたら 今日まんまと フライトキャンセルになってて｡

ウケますよね あいつ 今頃 家で 詰められてんじゃないですかね？

マジでザマ～！ 地獄に落ちろって感じですよね｡

(麻美) え？ ちょっと待って…｡

それってさ 937便？

え… そうです｡

(麻美) 中村さん キャンセルになったの？

あ そう聞いてますけど｡

(麻美) あぁ…｡

📱(着信音)

(麻美) はい もしもし｡

お疲れさまです｡

はい もちろんです… もちろんです！

ありがとうございます はい 向かいます｡

はい！ ありがとうございます｡

(麻美) カッ…｡

(麻美) チッ チッ チッ…！

>> おぉ ほほほ…｡

(麻美) 河口さん！

あんた 救世主だよ～！

ありがとうございます…｡

(麻美) ⟨恐らく この170年の中で 一番のスーパーファインプレー⟩

⟨せっかくなので 別角度で⟩

マジでザマ～！ 地獄に落ちろって感じですよね｡

⟨イエス！⟩

(麻美 はなをすする音) ありがとうございます｡

⟨しかも まさかの…⟩

(監督) 〔不倫を阻止するぐらいじゃ 弱いですよね〕

(麻美) ⟨不倫阻止くらいが…⟩

(脚本家)〔死んでしまった 親友の命を救うとか〕

〔大勢の命を救うとかね〕

(麻美) ありがとう｡ ⟨親友と大勢の命を救った⟩

いってきます ありがとう｡

>> 大丈夫ですか…｡

(麻美) ありがとう｡

⟨ナイス 河口さん！⟩ ありがとう｡

⟨全然ピンときてないけど⟩

(麻美) ⟨こうして私たちは 念願の937便に機長と副操縦士として搭乗することになった⟩

⟨これで ついに なっちとみーぽんそして 180人の乗客の命を救…⟩

(高城) すいません｡

どちらが宇野さんですか？

あ… 私ですけど｡

はじめまして 私 高城という者です｡

ちょっとお時間よろしいですか？

はあ…｡ >> あのお話ししたいことがございまして｡

(麻美) ごめんなさい｡

これからフライトなんで またにしてもらえますか？

２分だけでもお願いします 手荒なまねはしたくないんで｡

時間もないので手短に言いますね｡

実は私タイムリーパーなんです｡

え？

(麻美) え？

つまり 人生２周目なんです｡

単刀直入に言いますね｡

12時20分発 台北行き937便の航路を 変更してもらえないですか？

航路を変更？

(麻美) あの…｡

無理を言ってるのは 重々承知しています｡

ですがね 変更してもらわないと ホントに困るんです｡

何でですか？

私には 別れた妻がいましていつか復縁したいと 思ってたんですが その矢先に彼女の乗った飛行機が 墜落したんです｡

で まぁ 調べたところ その墜落の原因というのがスペースデブリとの激突でして｡

で まぁ この２周目は それを何とか回避したくてこうして航路の変更を お願いにまいりました｡

信じ難いかもしれませんが このまま行くと937便は墜落します｡

そして 180人の命が 奪われるんです｡

お話を 聞いていただけないんであれば私も本意ではありませんが 強行手段に…｡

あの すいません すいません｡ >> 何ですか？

そのつもりです｡ >> え？

元々そのつもりなんです ね？

(麻美) うん｡

言われなくても 航路は変更する予定です｡

何で？

私 ６周目なんで｡

は？

(麻美) 私 ５周目です｡

そうなんですか？

(麻美) うちらは その事故を阻止するためにこの仕事に就いたんで｡ >> ええ｡

え？ じゃあ 航路 変更してもらえるんですか？

(麻美) だから そのつもりです｡

いや ホントに ありがとうございます｡

このご恩は 一生忘れません｡

(麻美) すいません｡

フライトなんで 失礼します｡

(高城) そうですよね どうぞ｡

ありがとうございます｡

お気を付けて｡

ハァ…｡

(真里) ビックリしたね｡

(麻美) いやぁ マジで焦った｡

あんなことあんだね｡ >> ね｡

(麻美) 別にいいんだけどさ｡ >> 何？

(麻美) あの人さ 人生やり直してんのに離婚は回避できなかったんだね｡ >> 確かに… あとさ これも全然いいんだけど言っていい？

(麻美) 何？

自分のこと タイムリーパーって 言っちゃうのダサくない？

(麻美) ダサい ｢２周目｣でいいじゃんね｡ >> うん しかもさ その後｢つまり 人生２周目です｣ って言ったじゃん｡

だったら 最初から そう言えばいいじゃんね｡

(麻美)｢タイムリーパー｣が 言いたかったんだろうね｡

そっちのほうが雰囲気あるからね｡

(麻美) ⟨こうして 一瞬ドキっとしたけど私たちは無事…⟩

(麻美) ⟨台北行き937便に 搭乗することができた⟩

皆様 本日は日本ジェットスカイを ご利用いただきありがとうございます｡

当便の機長は近藤 副操縦士は宇野｡

チーフパーサーは 柏原でございます｡

⟨そして…⟩

管制にリクエスト｡

Fukuoka Control, Jet Sky niner tree sevenRequest heading 260 due to cloud.

(ｽﾋﾟｰｶｰ)(管制官) Jet Sky niner tree seven, approved.

(麻美) ⟨悲願の航路変更を果たした⟩

♪～

>> ハァ… ねぇ あーちんさぁ｡

(麻美) ん？

次 生まれ変わるなら 何がいい？ 人間？

(麻美) あぁ 人間だったら そりゃ うれしいけどでも まぁ 何だかんだ もう 170年 人間やってきたからさ別に もう絶対人間がいいとか そういうのはなくなったかな｡

>> そっか｡

(麻美) あっ でもまた 地元に生まれたいかな｡

>> 北熊谷？

(麻美) うん｡

何か 知らない場所に 人間として生まれるんだったら他の生き物でいいから 北熊谷がいい｡

あ～ それはちょっと 分かるかもなぁ｡

(麻美) あっ でも うちの地元 海ないから海ゴキは無理かもな｡

いや 私 別に 海ゴキ確定じゃないからね｡

(麻美) あ じゃあ 陸ゴキか｡

陸ゴキは もう 普通のゴキブリじゃん｡

(麻美) あっ…｡

♪～

(麻美) ⟨そして 937便は…⟩

⟨無事 台北空港に着陸⟩

あぁ～ 何か 疲れがどっと出た｡

ずっと張り詰めてたからね｡

(麻美) まりりんなんか 200年くらい 張り詰めてたんじゃないの？

そうかも だって そのためだけに生きてたからさ｡

(麻美) いやぁ よく頑張ったよ～｡ >> 頑張った～｡

(美穂:夏希) お～い！ お～い！

あっ｡

(麻美) あ～！

(美穂) すご～い！

(麻美) 何 何 何…｡

(美穂) カッコよ～！

>> ２人 乗ってたの～？

(美穂) 乗ってたの！

ビックリしたよね｡

(夏希) ねぇ ビックリしたよね！

何かさ 機内アナウンスから知ってる声がするって思ってさ｡

(美穂) そしたら なっちがさ｢あれ？ これあーちんじゃない？｣ って言って｡

｢いや 似てるだけでしょ｣ とか言ってたら｢機長は近藤 副操縦士は宇野｣ って言ったから｢うわ～！｣ってなったんだよね｡

(夏希) 超興奮したよね｡

(美穂) した～！ ２人で乗ることあるんだ？

>> うん たまにね あるんだよね｡

(夏希) そうなんだ｡

(美穂) ２人はさ この後 まだ仕事？

(麻美) ううん 今日あした休みであさって 帰るよ｡

(美穂) おっ！

(夏希) じゃあ ごはん食べ行こうよ｡ >> おっ！

(麻美) 行こ 行こ！

(美穂) 行ける？ やった～！

うれしい 最高｡

(夏希) うれしいね～｡

(美穂) すご～い｡

(夏希) すご～い｡

(美穂) めっちゃ似合ってるよ｡ >> えっ ホント？

(夏希) 何かさ ４人そろうと 海外来た感じしないね｡

>> 急にさ 北熊谷感 出るよね｡

(美穂) モンターニャ感ね｡

(夏希) ヤバい パスタの口になっちゃうね｡

(麻美) このままラウンドワン行く 流れだよね これね｡

(夏希) そうだね｡

(美穂) そうだ ラウンドワンで 思い出したんだけどさ見て見て これ｡

ジャ～ン｡

>> うわ！

(麻美) 幼いね｡

ねぇ 私もさ プリクラ持ってきたんだけどさ｡

(美穂) ウソでしょ～｡

ほら｡

(美穂) うわ～！

(夏希) うわ～ すご～！

(美穂) 待って待って これポーズ同じじゃない？

(麻美) 熊谷ビューティー学院ね｡ >> これ みんなやってたよね｡

(夏希) これ ラウンドワン？ >> うん 出来てすぐだよね｡

(麻美) 中２の秋かな？

(美穂) うちらもそれくらいじゃ…？

(夏希) うん ほぼ同時期ぐらいじゃない？

(美穂) そうだよね｡

一緒に撮ればよかったね｡

(３人) ねっ｡

(美穂) だってさ ほら ポーズ同じだから ガシャ～ン｡

すごい 一緒に撮ったみたいじゃん｡

(美穂) もう 一緒に撮ったでよくない？

(麻美) そうだね｡

(夏希) ていうかさ みーぽんも まっさんもよくこんなの大事に取ってたね｡

(美穂) 私 結構こういうの取ってるよ｡

プロフ帳とか｡

(夏希) ホント？

(麻美) ⟨こうして私たちは 台北だということを忘れて地元の話で盛り上がった⟩

(真里:麻美) いやぁ～ アハハ…！

(麻美) 楽しかった！ >> 楽しかったね～！

アハハ！

(麻美) うちら 朝 機長に毒盛るつもりで 家 出てるからね｡

いやぁ ホントだよ～ うまくいってよかったね！

(麻美) あとさ ２人とのブランクも かなり埋まった気がしない？

>> 埋まった 埋まった うん｡

(麻美) フフ！

私 空港で ｢あーちん｣って呼ばれた時マジで泣きそうになったもん｡ >> いやぁ～ あれはうれしかったね｡

(麻美) うれしいよ～｡ >> うれしいね｡

(麻美) だって 75年ぶりの｢あーちん｣だよ｡

そうだね～｡

(麻美)｢まっさん｣って何？

知らないよ… 何 ｢まっさん｣って｡

(麻美) ねぇ 今まで｢まっさん｣って 呼ばれたことあった？

いや ないよ 初｢まっさん｣だよ｡

(麻美) だよね｡

え～ 何で今回 急に ｢まっさん｣になったんだろう？

(麻美) バタフライエフェクト？

バタフライエフェクト？ ｢まっさん｣が？ ショボくね？

(麻美)｢バタフライまっさん｣だ｡

何だよ ｢バタフライまっさん｣って｡

(麻美) ⟨とにもかくにも この日私たちは無事 ミッションをクリアした⟩

⟨ただ まっさんだけは バタフライだった⟩

まっさん！ バタフライまっさん！ >> アハハ…！

(麻美) ⟨翌年 私とまっさんは パイロットを辞めて地元に帰ってきた⟩

>> じゃあね！

(麻美) じゃあね～！

(寛) 麻美！

(麻美) えっ？ 何してんの？ 何で？

(寛) 迎えに来たの｡

(麻美) え～！ ヤバ～い！ 超うれしい！

やった！ やった！

ただいま～！ >> おかえり｡

(麻美) 何 何～｡

今 お母さん こぐま寿司に お寿司取りに行ってる｡

(麻美) お母さんもいるの？ お寿司？ やった｡

(寛) あ～ 来た来た｡

(久美子) おかえり 麻美｡

お寿司 お寿司｡

(麻美) イェ～イ！

(久美子) 買ってきた 松！ 松 買ってきたんだよ｡

(麻美) ヤバ～い｡

遥は元気？

(久美子) 元気 元気｡

毎週のように こっち来るよ｡

(麻美) ホント？ 近いしね｡

賢ちゃんとは うまくやってんの？

うん 賢ちゃんもよく来るよ｡

あっ そうだ 聞いて｡

(麻美) 何？

お父さん 今までずっと 男１人だったでしょう｡

だから 賢ちゃん来てくれるのが うれしいみたいでさ｡

(麻美) あ～ 今まで何げに 肩身狭かったのかね｡

そうかもね だからね 賢ちゃん来るとちょっとだけ態度が大っきいの｡

(麻美) あぁ！

ハハハ…｡

(麻美) まぁさ 賢ちゃんにも威厳を 見せておきたい時なんじゃない？

好きにさせといてあげなよ｡ >> そうか 威厳ね｡

ねぇねぇ｡

(麻美) 何？

それって 本人がいないところで する話じゃないかな？

(麻美) お父さん いったん お風呂行っといでよ｡

あ いや もう遅いね｡

(麻美) 威厳だね｡ >> うん｡

(麻美) ⟨こうして 実家に戻ってきた私は８か月後に 地元で再就職した⟩

⟨そして あっという間に３年が経ち…⟩

⟨私も ついに40歳を迎えた⟩

ごちそうさまでした｡

(賢治) それ 下げちゃいますね｡

(麻美) あっ ごめんなさい｡

ありがとう｡

(賢治) 大丈夫っす｡

ありがとう ごめんなさいね｡

(麻美) 賢ちゃん 休みいつまで？

(遥) あと２週間くらい？

(麻美) 今日 泊まってくの？ >> ううん お昼食べたら帰るよ｡

ねぇ じいじ それ お風呂のやつだからね｡

うん うん｡

(麻美) うちらの時 あんなに 買ってもらえなかったよね｡

(遥) お姉ちゃん まだ 買ってもらったほうじゃない？

(麻美) そう？ あれ お父さん買ったんでしょ？ 全部｡

(遥) そうみたい｡

(麻美) うわ だいぶ奮発したね｡

(遥) ねぇ～ どこに そんなお金あったんだろうね｡

麻美！ もう52分だけど 間に合うの？

(麻美) 出る出る｡

ほら｡

(麻美) 遥 乗せてって｡ >> いいよ～ もう出る？

(麻美) いってきます｡

あっ 遥 遥 遥｡ >> ん？ 何？

(麻美) これじゃない？ >> それだ｡

ほぼ全部使ってんじゃん｡

(麻美) すごいね 孫パワー｡

はい｡

(小銭の音)

(麻美) いつもありがとう 送り代｡ >> ありがとう｡

♪～

そういえば 何でパイロット 辞めちゃったの？

(麻美) あ～ ん～ 何か働くなら地元が いいかなと思って｡ >> そっか｡

まぁ 家もあるし友達もいるしね｡

(麻美) そうなんだよね｡

てか 辞める前に １回くらい お姉ちゃんの飛行機乗りたかった｡

(麻美) そっか 結局 乗らなかったもんね｡ >> そうだよ ずっと運ぶ側だもん｡

(麻美) そっか ごめんね 運べなくて｡ >> いいよん｡

(真里) あーちん！

(麻美) 後でね～｡ >> はいよ～｡

運んでるね｡

(麻美) 運んでるね｡

(真里)｢バイバイ｣って手 振って｡

(麻美) ⟨ちなみに 再就職先は市役所⟩

(市民) 何とかなんないの～？

(麻美) そうですね｡

こればっかりは規則なんで｡ >> 何だよ もう融通利かねえな｡

(麻美) ⟨何周しても ここでは とにかく怒られる⟩

⟨ただ これまで数々の苦難を 乗り越えてきた私にはもはや 何てことはない⟩

河口さんは どうして戻ってきたの？

ＣＡも やり甲斐はあったんですけどでもやっぱり 時間が 不規則な仕事じゃないですか｡

(麻美) 国際線は時差もあるしね｡ >> そうなんですよ｡

私 ずっと市役所勤めだったんでもう どうしても あの生活がなじめなくて｡

(麻美) そっか ここは何年働いたんだっけ？

えっと 336年ですね｡

(麻美) じゃあ なじめないね｡ >> はい もう市役所しか 無理な体になってました｡

(麻美) じゃ ここから また なぞっていくの？

あぁ いや せっかくなんで仕事以外は いろいろと新しいことにチャレンジしてみようかなって 思ってます｡

(麻美) いいじゃん いいじゃん｡ >> はい｡

(麻美) ⟨他人の湯飲みは 引き続き使っているけど⟩

(麻美) ⟨こっちに戻ってきてからは月２くらいのペースで ４人でごはんを食べている⟩

⟨ちなみに 今日は私の誕生日⟩

⟨流れ的には そろそろプレゼントが出てくる⟩

⟨そんな一見 幸せな状況下で私は今 重大な問題に直面している⟩

⟨それは… プレゼント見え過ぎ問題⟩

⟨ここまで見えてると気付いていないふりも かなり苦しい⟩

⟨できれば 早めに紹介してもらいたい⟩

だって 熊谷ビューティー学院 行ってなかった？

⟨なっち そろそろ紙袋を…⟩

⟨イオンで買ったであろう その紙袋を！⟩

⟨もう許して… 話が入ってこないから⟩

⟨ダメだ もう限界⟩

いったんごめん ちょっといい？

(夏希) うん｡

(麻美) もうちょっと待ってようかなとも 思ったんだけどさすがに限界だから言っちゃうね｡

(美穂) 何？

(麻美) なっち… そろそろ紙袋を 紹介してもらってもいいですか？

(夏希) ん？ 紹介？

(麻美) 今日ね 誕生日じゃん 私｡

(３人) うん｡

(麻美) プレゼントでしょ？

(夏希) あっ これ？

(麻美) ごめんね こっちから触れちゃって｡

でもさ こんだけ丸見えだとさ さすがにさ気付かないふりっていうのにも 限界があるじゃん｡

(夏希) あっ ごめん これ違うの｡

(麻美) え？

(夏希) これ 私の個人的なやつ｡

(麻美) そうなんだ…｡

⟨やってしまった⟩

⟨完全にやってしまった⟩

(美穂) でも ほら ねぇ… ね？ なっち｡

(夏希) あ～ そうそう… ちゃんとプレゼントもあるよ｡

うん ちゃんとあるんだよね｡

(３人) あーちん お誕生日おめでとう｡

(麻美) ありがとう ありがとう｡

(拍手)

(店員) おめでとうございます｡

(麻美) ありがとうございます｡

(美穂) あっ かわいい！

(麻美) かわいい｡

(真里) いいね！

(美穂) いいね いいね 写真撮ろう｡

(夏希) 撮ろう 撮ろう｡

(真里) 私が撮るわ｡

(麻美) ⟨恥ずかしい 恥ずかしい 恥ずかしい 恥ずかしい⟩

(美穂) イェ～イ｡

(麻美) ⟨あ～ 恥ずかしい⟩

(夏希) イェ～イ｡

(麻美) ⟨恥ずかしい！⟩

⟨うれしいけど 超恥ずかしい！⟩

(夏希) これ 開けて 開けて｡

多分ね あーちんが 今 一番欲しいやつだよ｡

(麻美) ホントに？

あっ ホントだ めっちゃ欲しかったやつ｡

⟨確かに欲しかったやつだしみんなから祝ってもらえて 超うれしい⟩

⟨だけど今は その100倍 恥ずかしい！⟩

けど ごめん いったん 整理させてもらってもいいですか｡

(夏希) 整理？ >> そうなるよね｡

(美穂) このまま次には行けないよね｡ >> 行けないね｡

(麻美) なっち～｡

(夏希) え？ 何？

(麻美) 私 超恥ずかしいじゃん｡

(美穂) これは恥ずかしい｡

私だったら 舌噛み切って 死ぬレベルだね｡

(夏希) え～ 何で？

(麻美)｢何で？｣じゃないよ｡

誕生日当日にさ みんなでごはん食べててよこの目の前にさ 意味深な紙袋があったらさそんなん 自分の誕生日プレゼント だと思っちゃうじゃん｡

(美穂) ぶっちゃけたね～｡

(夏希) そっか そういうことか｡

ごめんごめん｡

(美穂) 誕プレトラップだったね｡ >> まんまと引っかかったね｡

(麻美) 引っかかんない人いないでしょ？

(美穂) 一応 段取りとしては なっちがプレゼント出すタイミングで ｢おめでとう！｣だったからさ｡

>> うちらは待ってるしかなかった…｡

(美穂) そうなんだよ｡

(夏希) 私は もうちょっと話してからだな と思ったの｡

(美穂) これがなかったら それでもいけたと思うんだけどもう あーちんがさ 紙袋に目線いった時点で｢そろそろヤバい｣と思ってさ めちゃくちゃ なっちにさアイコンタクト送ってたのに 全然気付かないんだもん｡

見た？ >> 見た｡

(夏希) 話に夢中で気付かなかった｡

(麻美) ちょっと待って…｡

私が紙袋チラ見してたのも バレてたの？

>> うん｡

(美穂) うん｡

>> 合計４回 チラしてたよ｡

(美穂) えっ ３チラじゃない？

>> ４チラだね 私 数えてた｡

(美穂) あ マジ？

(麻美) やめてよ もう… 超恥ずかしいじゃん｡

(夏希) ごめん あーちん ４チラまでさせて ごめんね｡

(美穂) そういえばさ なっちの紹介しない問題ってさ前にもあったんだよね｡

(夏希) いつ？

(美穂) ほら 中学の時に ラウンドワンで ２人で遊んでた時になっちの塾の友達に バッタリ会ったじゃん｡

(夏希) 塾の友達？

(美穂) うん そしたらさ何か なっち その子を特に紹介しないまま目の前で 結構がっつり話し始めたの｡

(麻美) なっちっぽいね｡

(夏希) 言われてみればそんなことあったかも｡

(美穂) しかもなっち うちら残して そのままトイレ行ったからね｡

>> うわ～ ハハハ！

(麻美) ダメだよ なっち｡

そういう時は膀胱破裂しても 一緒にいなきゃダメ！

(夏希) 私 トイレなんて行ったっけ？

(美穂) 行ったよ｡

仕方ないからさ 私 名前も知らないその子とクレーンゲームやったんだもん｡ >> よくその状況でやったね｡

(美穂) しかもね その子 デッカいポッキー取ったの｡

(麻美) マジで？

(美穂) その空気の中デッカいポッキー取れるって すごくない？ >> ハート強いね｡

(麻美) その子 大物になるよ｡

(美穂) うん｡

(夏希) ちなみに すーさんね｡

(美穂) あっ すーさんっていうんだ｡

(夏希) 霞中の すーさん｡

(美穂) 25年越しに名前知れたわ｡

(夏希) すーさんね 今 市議会議員だよ｡

(３人) え？

(麻美) マジで？ >> えっ？

すーさんってさ もしかして 鈴木泰子？

(夏希) そうそう…｡

(３人) え～！

(美穂) 知らなかった｡

(麻美) ホントに大物になってるじゃん｡ >> すごっ｡

(夏希) すーさん 元気かな？ あっ 電話してみる？

(美穂) えっ しなくていいよ｡

(麻美) 何話すんだよ｡

(夏希)｢今 すーさんの話 してたんだよ｣｡

(３人) いらない いらない…｡

(麻美) ねぇ この後 どうする？ >> カラオケ行く？

(美穂) うん｡

(麻美) カラオケね…｡

(夏希) この間も行ったしね｡

(美穂) いつも ここでごはん食べてカラオケ行くパターンだもんね｡

(夏希) そろそろ新しい扉 開きたいよね｡

(麻美) あっ ボウリングは？

(美穂) ボウリングか～｡

(夏希) 悪くないんだけど あれって結局 同じことの繰り返しじゃん｡

>> 倒しても すぐ立てられるしね｡

(麻美) そういうゲームなんだけどね｡

(夏希) じゃあさ ビリヤードは？

>> あぁ…｡

(麻美) ビリヤードねぇ｡

(美穂) 何か 絵が浮かばないんだよね｡ >> そうだね ４人でビリヤードやってる姿が 想像つかないんだよね｡

(夏希) やったことないしね｡

(麻美) カラオケにするか｡

(夏希:美穂) そうだね｡

(真里) 賛成｡

(夏希) よし 行こうか｡

(麻美) ⟨こうやって私たちは毎回 同じ流れでカラオケに行く⟩

>> その前にさ トイレ行っていい？

(麻美) いいよ｡

うちら みーぽんの車で向かってるからまっちょ 走って追いかけてきて｡ >> いやいや 待っててよ｡

(美穂) 私 今日 車じゃないんだよね｡

(麻美) そうなの？

(夏希) じゃあさ うちら 先に走って行ってるからさまっちょ 後から追っかけてきてよ｡

(麻美) ⟨ちなみに 彼女のあだ名は ｢まっさん｣から時を経て今は ｢まっちょ｣になっている⟩

>> 待ってよ？ 待っててね｡

(美穂) 待ってるよ～｡

(麻美) 福ちゃ～ん｡

(福田) おおお…｡

いらっしゃい｡

(麻美) 店長 取りあえず ２で｡ >> ＯＫ！

何 今日もいつもの集まり？ >> そう｡

(夏希) 店長 いつもの部屋 空いてる？ >> 空いてるよ｡

(麻美) いつもありがとね～｡ >> いえいえ｡

ちなみに 店長じゃなくて チーフだから｡

(美穂) いつも あそこ空いてるけどさ 経営 大丈夫？

>> おぉ… 大丈夫｡ >> ホント？

おぉ…｡

(麻美) 何か申し訳ないね 毎回 広い部屋で｡

(美穂) ホントだよね いつもポテト サービスしてくれるしさ｡

(夏希) 何かさ うちらも もう それに慣れちゃってるからさモンターニャの段階で ポテト 計算に入れて食べてない？

(麻美) 食べてる セットとして組み込んでるよね｡

(夏希) これ よくないよね｡

(美穂) よくないよ｡

当たり前だと思っちゃダメだね｡

てかさ 福ちゃんも やめるに やめれなくなってんじゃない？

(麻美) サービスポテト？ >> そう｡

(夏希) 毎回サービスしてんのに 急にやめたらうちらが経営厳しいのかなって 心配するから？ >> そうそう…｡

福ちゃん優しいじゃん｡

(麻美) もしかしてさホントはお店カツカツなのにさ バイトの子たちから白い目で見られながら ポテト揚げてたりするのかな？

(美穂) ない話じゃないよね｡

(麻美) そうだよね｡

カツカツポテトの可能性あるよね｡ >> え～ 無理しなくていいのに｡

(麻美) どうする？ 言う？

(夏希) 何て？

(麻美)｢福ちゃん 今日 ポテト大丈夫だよ｣って｡

>> あ～ それがいいかもね｡

(美穂) え でも それだとさ今日も福ちゃんが ポテト持ってきてくれる前提の言い方じゃない？

(夏希) 確かに｡

当たり前だと 思ってる感じするよね｡

(麻美) そうだね それ ちょっとずうずうしいね｡

(ノック)

(夏希) あっ 来ちゃった｡

>> お待たせしました～｡

(４人) ありがとう｡

はい これサービス｡

(夏希) ありがとう！ いつもごめんね 大丈夫？

全然大丈夫｡

(麻美) 福ちゃん ありがとね｡ >> いいえ｡

ごゆっくり～｡

(美穂) 持ってこさせちゃったね｡

(夏希) ホントに大丈夫だったかな？

ありがとう｡

(麻美) 今さちょっと 目潤んでなかった？ 気のせい？

>> それは気のせいでしょ｡

(麻美) ならいいけど｡

じゃあさ 追加でフード頼んでさ売り上げに 貢献すればいいんじゃないの？

(３人) あ～｡

え？ 違う？

(麻美) いや この流れでこんなこと言うの 非常に心苦しいんだけど言っていい？ >> 何？

(麻美) ポテトしか入んないんだよね｡

>> どういうこと？

(麻美) だから ポテト食べてちょうどくらいのお腹具合で 来ちゃってるからさ追加のフードは入んないんだよ｡

(美穂) ポテト合わせで来ちゃってるから｡

(夏希) 売り上げには貢献したいけど 入んないよね｡

(麻美) 売り上げには貢献したいのよ？ ただ 入んないのも事実だよね｡

(美穂) 残すの分かってて頼むのも さすがに失礼だよね｡

私もそうだわ｡

(麻美) 入んないよね｡ >> うん 入んない｡

(夏希) あっ じゃあさ 誰か呼んで 人数増やせばいいんじゃない？

>> ん！

(夏希) ねぇ！

(麻美) 確かに それだったら 売り上げも増えるしね｡

(美穂) 福ちゃんも喜ぶんじゃない？ >> 呼ぼう 呼ぼう…｡

(美穂) 誰呼ぶ？

じゃ 改めまして 乾杯！

(一同) 乾杯！

(麻美) ⟨30分後しーちゃんと加藤と ぺーたんとみさごんが来てプチ同窓会になった⟩

⟨福ちゃんも仕事を終えて合流⟩

(真里) えっ！ しーちゃん ママなの？

さくら保育園で 保育士やってんだよ｡

(静香) えっ！ そうなの？ そうなの｡

(静香) すごい！ 絶対 さくら保育園にするわ｡

やった～！ >> やった～！

(美佐) えっ！ やめたの？ いつ？

(夏希) もう だいぶ前だよね？ >> うん｡

９年前かな？ そうなんだ｡

(麻美) 私 ラストライブ見たよ まっちょと｡

>> そうだよね｡

(麻美) ねぇ まっちょ！

>> 何？

(麻美) 福ちゃんのラストライブ見たよね｡

>> 見た 青羽台のロータリーでね｡

(麻美) そうそう…｡

(夏希) 見たかったなぁ｡

(麻美) でも途中で 終わっちゃったんだよね｡

(美穂) えっ 何で？

規制かかっちゃってさ 駅前だから｡

(夏希) そうなの？

(美穂) すごくない？

>> 別に すごくはないけどね｡ >> すごい｡

(麻美) いや そうじゃないよ｡

(夏希) ん？

(麻美) 今の福ちゃんの言い方だと 人が集まり過ぎて規制かかったみたいだけど違うよ｡

(夏希) 違うの？

(麻美) 普通に歌っちゃいけない場所で 歌ってたからお巡りさんに止められただけだよ｡

(美穂) 何だ そうなの？

(夏希) 全然違うじゃん｡ >> まぁ そういうことだね｡

(麻美) ごめんね 福ちゃん あまりにも印象操作がさ…｡

何だよ～ 見逃してくれよ｡

(美穂) うちら 完全に伝説の路上ライブ みたいなの想像したよ｡

(夏希) 想像した｡

(麻美) でも ある意味伝説だったよね｡

(美穂) 何で？

(麻美) 朝から８時間やってたからね｡

(美穂) マジで!? 何でそんな長時間なの？

いやぁ やっぱ 最後だと思ったら なかなか踏ん切りつかなくてさ｡

だから逆に お巡りさんに 止めてもらってよかったよね｡

(美穂) そうだね｡

(夏希) そうだね｡

でも 福ちゃん やめちゃったんだ～ 残念｡

仕方ないよね 才能がなかったんだね｡

(夏希) そっか 才能なかったか｡

(麻美) でも それは仕方ないよね｡

(美穂) でも気付いてよかったよ｡

(美佐) 偉いよ｡

あの… ここはもう少し ｢そんなことないよ｣みたいなのを期待してたんだけど｡

(麻美) そうなの？

>> そうに決まってんじゃん｡

(麻美) 何か 自分で言ってるからさ｢そうなんだ｣と思っちゃった｡

(美穂) そう 本人が言うならね否定しようがないよね｡ >> ひどいなぁ｡

まぁね でも… そう思ったよ やめてよかったと思うし｡

(夏希) そっか そっか｡

でもさ 福ちゃん 音楽の才能は ないかもしれないけど身内を楽しませる才能はあるよね｡

(美穂) うんうん 分かる｡

>> あ そう？

(美穂) それも立派な才能だよ｡

(夏希) ねぇ｡ >> 確かに 世間では人気でも身内から嫌われてる人も いたりするしね｡

(麻美) そうだね｡

(美穂) 福ちゃんは その逆だね｡

(夏希) うん 逆｡

あの… 別に俺 世間から嫌われてはないよ？

(美穂) あ そっか｡

(麻美) でも うちら的にはさ売れるよりも 今の この感じがよかったよね｡

(夏希) そうだね ここ来たら いつもいるしね｡

(美穂) サービスいっぱいしてくれるしね｡ >> おぉ…｡

(美穂) じゃ どうぞ どうぞ｡

(夏希) 一曲 お願いします｡

何 歌おっかな～｡

♪～ あの優しかった場所は

♪～ 今でも 変わらずに

♪～ 僕を待ってくれていますか？

(麻美) ⟨なっちの言う通り福ちゃんには 音楽の才能はなかったけど周りの人を笑顔にする才…⟩

♪～ 遠ざかる姿に 唇 噛み締めた

(麻美) ⟨…能がある⟩

⟨うん ある… はず⟩

♪～ 寂寞の思いに

♪～ 近ごろ私達は

♪～ いい感じ

♪～ 悪いわね ありがとね

(麻美) ⟨そして この後も私たちは…⟩

(加藤)♪～ 粉雪 ねえ

♪～ 心まで白く

(麻美) ⟨延長に延長を重ね…⟩

♪～

♪～ 必ず手に入れたいものは

♪～ 誰にも知られたくない

♪～ 百ある甘そな話なら

♪～ 一度は触れてみたいさ

♪～ 今から一緒に これから一緒に

♪～ 殴りに行こうか

♪～

♪～ YAH YAH YAH YAH YAH YAH YAH

♪～

♪～ YAH YAH YAH YAH YAH YAH YAH

(麻美) ⟨久しぶりに 朝まで歌い明かした⟩

♪～

♪～ >> “Hello, Again ～昔からある場所～”

(麻美) 四十の体にはこたえるね｡

あのメンバーで集まるのって いつ以来？

(夏希) あそこまでそろうのは 成人式以来じゃない？

>> 20年ぶりぐらいじゃない？

(麻美) え～ やだ｡

もうそんな経つの？

(美穂) 経つでしょ｡

だって うちらが ちょうど40だから20年だ｡

>> うわ～｡

(麻美) 怖い～ 怖い 怖い…｡

(美穂) 怖いね～｡

(夏希) もうさ 30過ぎてから時間経つの早過ぎだよね｡ >> 早いね｡

(美穂) 何か それってさ 本で読んだんだけど年を取るにつれて １年の相対的な 長さが短くなるからなんだって｡

>> あ～｡

(麻美) うん…｡

(夏希) どういうこと？

(美穂) ん？

(麻美) だから ５歳の子にとっての１年って人生の５分の１じゃない？

(夏希) うん｡

(麻美) だけどさ 50歳の人にとっての １年って人生の50分の１でしか ないじゃない｡

(夏希) あぁ そうだね｡

(麻美) そうやって 年を重ねるにつれて人生の１年の比率が 小さくなっていくから早く感じるようになる｡

(夏希) あぁ｡

(麻美) だよね？ そういうことだよね？

(美穂) そういうことよ｡

(麻美) 分かった？

(夏希) はぁ｡

あっ じゃあ あれは？

(美穂) 何？

(夏希) 家でさ シャワー出してから お湯になるまでの時間って長く感じるじゃん｡

(美穂) うん 感じるね｡

なかなか お湯にならないね｡

(夏希) あれさ 実際 数秒なんだろうけど 体感だと２～３分だよね｡

>> 朝はさ 特に長く感じない？

(美穂) あと たまにさこのまま永遠に お湯に なんないんじゃないかって不安にならない？ >> なる なるよね｡

(夏希) あれは何で？

(麻美) あれはね 給湯器の経年劣化｡

(３人) え～！

(夏希) 何それ｡

(美穂) 違うよ そういう話じゃないよね？ >> 体感の話じゃん 体感の｡

(麻美) でもさ うち 去年新しくしたら 即 お湯出るようになったよ｡

(美穂) 何それ！ うちらの風呂が ボロいっつってんのか！

♪～

(４人)♪～ YAH YAH YAH YAH YAH YAH YAH

♪～ YAH YAH YAH YAH YAH YAH YAH

(夏希) あーちん これ 何の主題歌だっけ？

(麻美)“踊る”じゃない？ みーぽん 分かる？

(美穂) いや “お金がない！”じゃない？ なっち 分からないの？

(夏希) いや その２つじゃないと 思うんだよね｡

ぴょろたん 分かる？

“振り返れば奴がいる”｡

(３人) あ～｡

(夏希) そっか｡

今さらなんだけどさ 私 真里なんだけど何で｢ぴょろたん｣に なったんだっけ？

(３人) 覚えてないねぇ｡

(真里) 何それ～｡

(４人) アハハ…｡

(麻美) ⟨こうして私たちは ４人とも無事基本寿命を全うし…⟩

(麻美) ⟨私は この年の冬に その生涯に幕を閉じた⟩

⟨享年98⟩

⟨合計232歳⟩

いってきます！

遥おばあちゃん 何見てんの？

ん？ あそこにねハトさんが並んで止まってるから 見てたのよ｡

ホントだ 仲良しだね｡

(遥) そうだね～｡

♪～